

誰を誘うか

「これは間伐材で作った筆なんです」。東京里山開拓団の代表・堀崎茂さん(43)は待ち合わせの場所に、目印として手

作りの木工具を持ってき
てくれた。木の枝だと思
ったものは、丁寧にやす
りをかけられてスベスベ
になった筆。先端部分を
切り裂き、毛に見立てて
いる。「これで1月に書
き初め大会をやったん
ですよ」。ほにかむよう
に笑いながら、里山の魅
力から話してくれた。

元々、アウトドアや登山が好きだった堀崎さん
は2006年、転職のた
め上京。会社では新規事
業の立ち上げに関わる傍
ら、登山だけでなく、プ
ラスアルファのことをし
たいと思うようになって

自分も豊かに

ボランティア事始め



1

児童養護施設の子供と里山を開拓



自分たちで里山に畑も開墾した

て。

児童養護施設とは接点
がなかったが、社会のひ
ずみが一番弱いところに
出る場所だと感じてい
た。また本来、税金で運
営されるはずの場所が、
民間の心ある人たちの運
営に委ねられていること
も疑問に思っていた。そ
こで、東京ボランティア
・市民活動センターに見
童養護施設を紹介しても
らい、11年1月から施設
の小学生たちと来るよう
になった。

子供たちはすぐに里山
に夢中になった。木にロ
ープを掛けて「アルプス
の少女ハイジ」風のプラ
ンコを作った。畑も開墾
した。腐葉土ももち
ろろん手作り。落ち葉も皆
で競争して集めると熱中
する。焼き芋のほくほく
掛けている。
「あのお兄さんはもう
作った筆での書き初め
。子供だけでなく、大
人も熱中する。失敗もす
るけれど、素の自分を出
すことで、お互いに自然

な関係を築いていく。
継続することが肝心
現在、里山開拓団には
15人のボランティアがい
る。活動は月1回のミー
ティングと里山行きだ。
参加する子供が6人、大
人は同数以上の参加を心
掛けている。
「あのお兄さんはもう
来ないの?」。しばらく
顔を見せない大人がいる
と、子供たちは敏感だ。
だからこそ「ボランティ
アは自分のペースで、細
本なのだ。」

は伸び伸びと自分を開放
いう願いもあるからなの
だ。
最後に、活動を応援し
てくれている絵本作家・
ボランティアである。
この間の活動が認めら
れた。『よりたくましく、
セブナイレフン財
団から「東京の緑を守ろ
うプロジェクト」の助成
を受け、14年に東京キ
ャククラブの「社会公益
賞」を受賞している。し
いんだと、2歳と7歳の
子供育てでも救われまし
た」

膨らむ里山構想
堀崎さんは、これを毛
デルケースにして広げた
い——という夢を持って
いる。里山開拓は自然保
護につながる。児童養護
施設の子供たちにとって
は伸び伸びと自分を開放
いう願いもあるからなの
だ。
最後に、活動を応援し
てくれている絵本作家・
ボランティアである。
この間の活動が認めら
れた。『よりたくましく、
セブナイレフン財
団から「東京の緑を守ろ
うプロジェクト」の助成
を受け、14年に東京キ
ャククラブの「社会公益
賞」を受賞している。し
いんだと、2歳と7歳の
子供育てでも救われまし
た」

「子供たちへの支援と
いうよりも、たくましく
育ってほしいんです。18
歳になったら施設を出な
くてはいけない子供たち
に、仲間がいるんだと思
い出してほしい。支えら
れ、支え合って生きると
いう術を伝えられれば」
堀崎さんが企業や大学
にも里山活動を広げてい
るのは、18歳になった子
供たちが生計を立てられ
ます。
（編集部）
11全8回